

## 「片腕」川端康成

昭和 38 年（1963） 8 月号～昭和 39 年（1964） 1 月号

「片腕を一晩お貸ししてもいいわ。」と娘は言った。そして右腕を肩からはづすと、それを左手に持って私の膝においた。

「ありがとう。」と私は膝を見た。娘の右腕のあたたかさが膝に伝はつた。

「あ、指輪をはめておきますわ。あたしの腕ですといふしるしにね。」と娘は笑顔で左手を私の胸の前にあげた。「おねがひ……。」

左片腕になった娘は指輪を抜き取ることがむづかしい。

「婚約指輪ぢやないの？」と私は言った。「さうぢやないの。母の形見なの。」

小粒のダイヤをいくつかならべた白金の指輪であつた。

「あたしの婚約指輪と見られるでせうけれど、それでもいいと思つて、はめてゐるんです。」と娘は言った。「いつたんかうして指につけると、はづすのは、母と離れてしまふやうでさびしいんです。」

私は娘の指から指輪を抜き取つた。そして私の膝の上にある娘の腕を立てると、紅差し指にその指輪をはめながら、「この指でいいね？」

「ええ。」と娘はうなづいた。「さうだわ。肘や指の関節がまがらないと、突つ張つたままでは、せつかくお持ちいただいても、義手みたいで味気ないでせう。動くやうにしておきますわ。」さう言ふと、私の手から自分の右腕を取つて、肘に軽く唇をつけた。指のふしぶしにも軽く唇をあてた。「これで動きますわ。」

「ありがとう。」私は娘の片腕を受け取つた。「この腕、ものも言ふかしら？ 話をしてくれるかしら？」

「腕は腕だけのことしか出来ないでせう。もし腕がものを言ふやうになつたら、返していただいた後で、あたしがこはいぢやありませんの。でも、おためしになつてみて……。やさしくしてやつていただければ、お話を聞くぐらゐのことはできるかもしれませんわ。」

「やさしくするよ。」

「行つておいで。」と娘は心に移すやうに、私が持つた娘の右腕に左手の指を触れた。「一晩だけれど、このお方のものになるのよ。」

そして私を見る娘の目は涙が浮ぶのをこらへてゐるやうであつた。

「お持ち帰りになつたら、あたしの右腕を、あなたの右腕と、つけ替へてごらんになるやうなことを……。」と娘は言った。「なさつてみてでもいいわ。」「ああ、ありがとう。」

私は娘の右腕を雨外套のなかにかくして、もやの垂れこめた夜の町を歩いた。電車やタクシーに乗れば、あやしまれさうに思へた。娘のからだを離された腕がもし泣いたり、声を出したりしたら、騒ぎである。